

〔研究ノート〕

アナクサゴラスの自然論 (1)

瀬 戸 一 夫

本研究の課題は、ゼノン（ゼーノーン）のパラドックスとして知られている 4 種の議論および現存する著作断片に記された破壊的な諸論証との関連で、アナクサゴラス（アナクサゴラース）の謎めいた著作断片群を解説し、それら諸断片の背後に潜んでいる自然論の実像を浮かび上がらせることである。しかし、ゼノンの著作がアナクサゴラスの思想形成と著作の公表に先行していたのか否かについては、かねてより研究者たちの間で大きく見解が分かれ、現在でもこの前後関係は不明というほかない⁽¹⁾。このため、アナクサゴラスがゼノンの議論を踏まえたうえで、あるいは克服して自らの理論を構築したと想定することには、的外れである危険性が伴う。それでも、仮にこの想定にもとづいて、難解さを極める諸断片が合理的な内容として解説され、かれの自然論が結果的に首尾一貫した理論体系にまで復元されるのであれば、実像の復元という成果に加え、ゼノンの著作がアナクサゴラスに影響した可能性を高める結果も、同時にもたらされることになるのではないだろうか。そして、以下で試みられるのは、こうした両面的な課題の遂行である。

第 1 節 諸性質の定量化と空間的な大きさの特異性

事物の諸性質はいずれも、細かく区別することによって、無限に多様な程度ないし度合いになりうる。われわれは日頃から、様々な度合いの冷たさや熱さ、硬さや軟らかさ、あるいは重さや軽さなどを知覚し、あれこれ

の事物を感覚的に経験している。そして、たとえば氷は冷たくて硬く少し重いものであり、水はやや冷たく極度に軟らかくて少し重く、ドライアイスは非常に冷たく少し軟らかくてやや軽く、火はかなり熱くて硬くも軟らかくもなく極めて軽い、その他、いずれも一連の諸性質がそれぞれ固有の度合いであるような各事物（物質）であると、ごく自然に理解されているのではないだろうか。ここで、通常は当然すぎるために問題にしないことを取返して確認すると、熱さと冷たさ、硬さと軟かさ、重さと軽さはそれぞれ互いに正反対の性質であり、両者に共通する点是不在であるように思える。さらに、熱さと軟らかさ、冷たさと重さ、硬さと軽さなどは、共通点を考えてみるのが無意味なほど、いずれも根本から互いに乖離した二つの性質というほかない。

ところが、これほど互いに相容れない諸性質すべてに、実は共通することがある。それはすなわち、どの性質も空間的な大きさ（体積）をもつものから離れて単独には存在できず、大きさをもつ何かに属するという仕方でのみ存在できるということである。しかも、大きさをもつものに属するかぎり、すでに例示した氷、水、ドライアイス、および火がそうであったように、互いに根本から乖離した複数の性質が同じものに属しうる。それどころか、たとえば硬いだけで他の性質を完全に欠いたものはありえないため、事物はすべて、互いに乖離した複数の性質が、いわば相互に浸透し合い、同居する仕方では存在しているのである。そして、対立する二性質についても、これと同様に理解できるだろう。というのも、大きさをもつ或るものに、多くの熱さと少ない冷たさが属して、差し引き、やや熱いという度合いの熱さを、その或るものは呈している一方、同量の硬さと軟らかさがそれに属しているため、両者は相殺され、外見上は硬・軟の性質を欠いている等々、この種の理解の仕方は首尾一貫しているからである。

なるほど、以上のような説明に対して、異論があるのは当然のことである。というのも、重さと軽さが大きさをもつ或る一つのものに属している場合、互いに打ち消し合うとは考えられず、どれほど軽い性質でも、いく分かの重量であるからには、軽さが属することで、むしろそのいく分かだけ、より重いものになっていると思えるからである。しかし、重さとして「下方へ向かおうとする傾向」を、また軽さとして「上方へ向かおうとする傾向」をそれぞれ考えれば、両者は大きさをもつ同じ一つのものに属しているかぎり、互いに打ち消し合うことになるだろう。それゆえ、重さと

軽さの新たな定義によって、前段のような理解の仕方は維持される。

さらに、硬・軟の性質についても、微妙な点を確認しておかなければならない。なぜなら、同量の硬さと軟らかさが大きさをもつ或る一つのものに属し、互いに打ち消し合っている、硬・軟の性質が不在のではなく、硬くも軟らかくもない平均的な硬度、ないし軟度のものであるだけではないのかという異論も、当然のことながら予想されるからである。そこで、重さと軽さと同様、硬さを「硬くなろうとする傾向」と定義し、軟らかさを「軟らかくなろうとする傾向」と定義すれば、一方が他方を打ち消す仕方に対立すると理解できる。たしかに、これは不自然な定義であるように思えるけれども、われわれはたとえば火について、それが硬いものであるのか軟らかいものであるのかを問題にしない。もちろん、問題にすることは妨げられないにしても、火は極度に軟らかいというより、硬・軟の性質を欠いていると、少なくとも通常は疑念なく了解されている。したがって、硬さと軟らかさの新たな定義はこの了解と齟齬がなく、他の諸性質も同様に上述の形式で一律かつ量的に表現できるため、それらの理論的な扱いが可能になるのである。しかし、その可能性を実現するためには、重・軽と硬・軟の新たな定義が示唆しているように、われわれにとって馴染み深い重さと軽さ、ならびに硬さと軟らかさにもとづきつつも、それらとは次元の異なる諸性質が立てられなければならない。このように、或る意味では異様な課題を達成することにより、各性質を一律の形式で量的に扱う理論の基礎が初めて固まるのである。

ここまで、現代のわれわれにも具体的に思い描ける例をもとに、定量的な自然研究の基礎について検討してきた。そして、諸性質を量的に扱う理論の構築には、異様な課題の遂行が不可欠であり、用いた例での検討からその問題の一端が見えてきたのである。ところが、アナクサゴラスとほぼ同時代のゼノンも、これと質的に酷似する異様な議論を展開していた。ゼノンによると、付け加えられても、付け加えを被っている側が大きさに関して何ら増えず、取り除かれていても、取り除きを被っている側がより小さくならないのであれば、付け加えられているものも取り除かれているものも、まったく存在していなかったことになる。かれはこのように、抗いような論理展開で、厳密な論証を行っていた⁽²⁾。しかし、この論証は少なくとも読み方によって、事物の性質に秘められた真相を見事に暴露している。なぜなら、前掲の例でいえば、冷たくて硬く少し重い氷に、大き

さをもつものから離れては存在しえない冷たさが、さらに付け加えられることによってか、または冷たさと相殺されて潜在化している熱さが、同じその氷から差し引かれることによって、大きさ（体積）はまったく変わらずに、氷の冷たさだけが当初の数倍になると理解でき、しかもかれの論証どおり、付け加えられる冷たさであれ、差し引かれる熱さであれ、それら「自体としては」一貫して存在していなかったことに実際なるからである。

以上のように、ゼノンが展開している議論は、諸性質の量的な扱いにむけて新たな道を切り開いていると、少なくとも読み方によっては解釈できる内容であった。しかし、諸性質の定量化を成し遂げるためには、何らかの大きさ（体積）をもってのみ存在するにもかかわらず、事物の大きさを変えなく事物に属し、それでも空間的な大きさは次元を異にする量が、事物の諸性質を表す量（度合い）として厳密に定式化されなければならない。これはすでに述べた異様ともいえる課題の詳しいまとめである。果たして、これほど謎めいた量の定式化が、達成可能なのであろうか。ところが、アナクサゴラスの現存する諸断片には、かれがこうした難問に取り組み、その成果を記していた形跡が各所に見られる。後ほど、それぞれの断片に即して再論する予定だが、事物の大きさを変えず、しかも事物に属する仕方、何らかの大きさ（体積）をもってのみ存在できる諸性質が、量で精密に表現されなければならない。おそらくはまさにこの意味で、単独では存在しえない冷たさ、熱さ、硬さ、軟らかさ、重さ、軽さ、その他に代えて、かれは冷たいもの、熱いもの、硬いもの、軟らかいもの、重いもの、軽いもの、その他といった、言い換えれば空間的な広がりという意味的に表裏する用語を独自に採用し、定量的な理論の構築に不可欠な基礎としている。

ここでも具体例で考えることにしたい。空間的な大きさ（体積）を基準かつ尺度にして、まずはその基本単位を定め、定めた基本単位と同じ大きさ（体積）を占め、しかも差し引き完全に相殺される——今日的には「ゼロ」になる——熱いものと冷たいものを、それぞれ熱い性質と冷たい性質の基本単位に設定したとしよう。この場合、熱いものの基本単位は実のところ、2単位分の熱いものと1単位分の冷たいもので成り立っている、つまり差し引き1単位（基本単位）分の熱いものである可能性や、6単位分の熱いものと5単位分の冷たいもので成り立っている可能性もあり、あるいはまた別の成り立ち方で外見のみ1単位分の熱いもの、すなわち熱い性

質の基本単位であるのかもしれない。これは冷たい性質の基本単位についても同様である。しかしながら、便宜上の設定であることを認めつつも、事物の性質を定量的に表現する——目下の例では温度という度合いの——基準かつ尺度としてこの設定に従うと、たとえば2単位分の熱いものが2単位分の空間的な大きさを占めているのか、あるいは2単位分の熱いものが1単位分の空間的な大きさを占めているのか明確に区別される。このため、前者が2単位分の空間的な大きさをもつ1単位分（度合い1）の熱いものであるのに対して、後者は1単位分の空間的な大きさをもつ2単位分（度合い2）の熱いもの——熱さが前者の2倍——であると理解できる。この定量的な理解の仕方は、基本単位の空間的な大きさや、その大きさの熱いものがどの程度の熱さであるのかなどを、たとえどのように設定しても、また前述のとおり基本単位の成り立ちが無限に多様でも、設定に従うかぎり不変性を維持して厳密に成り立つ。さらに、如何なる性質も同じ形式で量的に表現できるため、諸性質の普遍的かつ定量的な理解が可能になる。しかも、仮にアナクサゴラスが以上のような方向で、諸性質の定量化を構想していたとすると、かれはその端緒となる重要な着想を、これもまたゼノンから獲得したと推定されるのである。

ゼノンのものとして今日まで伝えられている、運動に関する第二の議論（第二パラドックス）によると、足の速い追跡者は足の遅い逃走者にけっして追いつけない。かれはこのことを厳密に証明していた。追跡者は逃走者に追いつく以前に、逃走者がすでに前進し終えている区間の端まで、あらかじめ移動しなければならぬ一方、追跡者がその区間を通過している間に、逃走者はいく分かの距離を移動している。このため、追跡者は逃走者に追いつく以前に、逃走者がいく分か移動した区間の端まで、あらかじめ移動しなければならず、追跡者がその区間を通過している間に、逃走者はいく分かの距離を移動している。したがって、逃走者が追跡者より遅いと仮定されている分だけ、常により短い区間ではあっても、追跡者が直前の区間を通過している間に、逃走者はいく分かの距離をさらに移動し、足の速い追跡者は足の遅い逃走者にけっして追いつけない。以上が第二パラドックスの趣旨である。

ゼノンはこうした逆説的な議論によって、それまで自明視されていた通念を破壊し、瞬間的な移動という意味での運動が不可能であることを証明していた⁽³⁾。ところが、同じこの議論は意外にも、距離の移動とは次元の

異なる瞬間的な運動の可能性を暗示していたのである。なぜなら、もしもかれの議論が上述のとおりに展開されていたとすれば、どれほど短い区間であっても、追跡者がその区間を通過している間に、逃走者は「追跡者より遅いと仮定されている分だけ」の距離をさらに移動すると、おそらくは指摘されていたと考えられるからである。しかしながら、アナクサゴラスの構想と関連づけて検討するためには、この「追跡者より遅いと仮定されている分だけ」を、より具体的に理解しておく必要がある。

まず、逃走者がすでに前進し終えている区間の長さ（区間距離）を記号 a で表し、追跡者がその区間を通過している間に、逃走者が移動する区間の長さを記号 b で表す。そして、追跡者がこの区間距離 b を通過している間に、逃走者が移動する区間の長さを記号 c で表し、追跡者がこの区間距離 c を通過している間に、逃走者が移動する区間の距離を記号 d で表すことにしたい。さらに、追跡者が区間距離 d を通過している間に、逃走者が移動する区間の距離を記号 e で表し、以下同様にアルファベットを順に当てはめ、逃走者も追跡者も一樣な速さで、すなわち等速で動いていると仮定すれば、

$$a : b = b : c = c : d = d : e = e : f = f : g = \dots \quad \text{——式①}$$

という関係が、無限小の規模に至るまで一律に成り立つ。したがって、文字どおりの意味で解される瞬間には、どれほど短い距離であろうとも移動できない一方、上記のような一定の比率は、追跡者と逃走者との関係として、際限なく細分化されていく今この瞬間も双方に属することができるのである。現代の科学用語を当てはめると、一定の比 $a : b$ は比率で表された相対的瞬間速度の大きさであり、距離の移動から割り出される量で表現可能でありながら、距離の移動とは次元の異なる運動の真相を理論的に表現する量にはかならない。ゼノンの逆説的な議論はこのように、たとえ当人の意図しないことであつたとしても、それを厳密に読み解こうとする者にとっては、当時まだ知られていなかった運動の真相に気づかせるだけでなく、瞬間速度の大きさを精密かつ定量的に表現して理解する手法まで示していたのである。

たしかに、相対的瞬間速度の大きさは、あくまでも相対的に定まる度合いでしかない。しかし、何らかの度合いを便宜上の基本単位に定めて、速

度の大きさがそれぞれ何単位分に相当するのかを表すことにすると、あらゆる相対的瞬間速度の大きさが、程度あるいは度合いを表す値で量的に扱えるようになる。相対的瞬間速度は移動距離をもとに算定されるにもかかわらず、距離の移動から切断された、移動とは次元の異なる運動を表す度合いであり、大きさの一種である移動距離を付け加えることも差し引くこともなく、それ自体としてはそもそも存在（成立）しえないが、無限小に至るまで細分化されていく今この瞬間に、動いているものに属しているという仕方では、具体的な値をとって存在（成立）しうるのである。

以上のように、移動距離という空間的な大きさ（長さ）とは次元を異にしながら、空間的な大きさと境界を接して量的に表現される度合いが、隠されていた運動の真相として示されていた。そして、アナクサゴラスはこの新たな量を拡張し、事物のあらゆる性質に適用することになる。すなわち、無限小に至るまで細分化されていく事物のあらゆる部分で、諸性質が不変の度合いで維持される定量的な理論装置を、かれは最終的に創出したのではないかと推察されるのである。しかし、その新たな理論装置が首尾よく機能するためには、すでに論及した1単位分（基本単位）の空間的な大きさ（体積）をもつ2単位分（度合い2）の熱いものという例からも分かるように、諸性質すべてに共通する存在条件、すなわち空間的な大きさが、諸性質の度合いを測る定量化の基準かつ尺度でなければならない。空間的な大きさは、あくまでも基準かつ尺度であり、それに従って量的に表される側の諸性質とは根本的に役割を異にする。基準（尺度）のこうした特異性を見失うことは許されず、冷たいものと熱いもの、硬いものと軟らかいもの、等々の対立する諸性質対と同列に、大きいものと小さいものを設定するのは誤りであり、この設定は諸性質の定量的な理解に自己破綻をもたらす⁽⁴⁾。ところが、以上のような自己破綻の運命もまた、ある意味でゼノンの破壊的な議論が示していた。

ゼノンには運動に関する第四の議論（第四パラドックス）で、動きの基準（尺度）と測られる側の動いているものが無差別に同等とされるかぎり、必然的に「半分の時間がその倍と等しいことになる」という、まさに定量的な理解の破綻が避けられない結論を導いていた⁽⁵⁾。もちろん、これは運動理論に突き付けられた深刻な結論であるが、定量的な理論の構築を目指すすべてにとって、致命的な破産宣告であったに違いない。それゆえ、もしもアナクサゴラスが当時この破産宣告に直面していたとすれば、かれ

はゼノンの議論を踏まえたうえで、厳密に成り立つ定量的な理論の構築に専念していたことであろう。しかも、そのように仮定して解釈すると、上記の独創的な理論装置がどのように成り立ち、また機能するのかについて、従来よりも理解が格段に進展するのである。

たとえば、アナクサゴラスは独自の自然論を構想するにあたって、設定される基準（尺度）と基本単位の特異な身分といった、第四パラドックスとの対決から獲得される理論構築の鉄則に従ったようであり、先ほど述べたような、熱いものの基本単位が実は熱いもの2単位分と冷たいもの1単位分で成り立つその他の可能性を、きっぱりと否定することになったと推定される。というのも、基本単位はその意味（定義）からして最小の単位であり、熱いものの基本単位1が熱いもの2単位分をもとにして表されるためには、熱いもの2単位分が基準（尺度）の側に立つ最小単位でなければならず、この基準（尺度）をもとにして測られ、量で表される側に立つ熱いものの基本単位1は、最小単位（熱いもの2単位分）の半分でしかなく、それでも基本単位（最小の単位）であるからには「半分の度合い（または体積）がその倍と等しいことになってしまう」からである。こうした矛盾はまた、熱いものの基本単位が熱いもの6単位分と冷たいもの5単位分で成り立つその他でも、同様にして導かれるであろう。

基本単位は自由に設定できる。しかし、ひとたび設定された以上、それは一貫して性質の度合いを測り、それを表現する基準（尺度）の側に立つのでなければならない。これはおそらく、アナクサゴラスの理論形成にとって、決定的に重要なことであつたと思われる。実際、熱いものの基本単位が熱いもの2単位分と冷たいもの1単位分で成り立ち、それでいて熱いもの3単位分と冷たいもの2単位分で成り立つのかもしれない、……と不定であり、他の性質についても同様であれば、これはもはや定量的な理論の構築どころではない。とはいえ、基本単位の自由な設定には微妙なところがあるため、その検討は関連する著作断片を解読するまで先送りにしたい。また、いずれにしても、アナクサゴラスの自然論について理解を深めるためには、後の議論を先取りして粗描した以上の諸論点に留意しながら、さらに著作断片その他、現存する多くの史料を慎重に読み解く作業が不可欠である。

第 2 節 すべてのものの内にすべてのものどもが存在している

前節では現存する断片や史料を引用せずに、ゼノンの各パラドックスが当時もたらしたと推察される理論上の根本問題に触れながら、アナクサゴラス自然論の一面を予備的に描き出しておいた。断片群や史料群の解説を控えたのは、特に前者がいずれも難解さを遥かに超えて、率直な言い方をすれば、ほとんど狂気としか思えない文脈と内容であるため、複数の断片を関連づけたときに初めておぼろげにイメージされることがまず確認され、個々の断片を読み解く方向性があらかじめ示された後に、原典からの引用と訳出を試みるほかないと判断されたからである。

しかしながら、それでも意味不明であることに堪える覚悟をして、シンプリキオスが『アリストテレス「自然学」注解』に遺した著作断片の一つを、ともかくも引用して慎重に訳出してみることにしよう。なお、括弧つきの引用符〔“と”〕は本稿の著者による補足であり、この引用符の補足については、以下で他の断片を引用する場合も同様とする。さらに、原文 1 行目の〔δῆ〕は直前にある《δὲ》に代えて、LM と FA が採用している語である⁽⁶⁾。断片番号は慣例に従って DK のものを採用する。また、原文 3 行目の〈δὲ〉は LM による補足、訳文中の〔 〕内は引用者による補足や換言などであり、他の訳文でも原文でも、この〔 〕の意味は同様としたい。

DK, B6; LM, D25 Simpl. *In Phys.*, 164. 25-165. 1.

καὶ ἀλλαγῶν δὲ οὕτως φησὶ · [“] καὶ ὅτε δὲ [δῆ] ἴσαι μοῖραι εἰσι τοῦ τε μεγάλου καὶ τοῦ μικροῦ πλήθος, καὶ οὕτως ἂν εἴη ἐν παντὶ πάντα · οὐδὲ χωρὶς ἔστιν εἶναι, ἀλλὰ πάντα παντὸς μοῖραν μετέχει. ὅτε 〈δὲ〉 τοῦλάχιστον μὴ ἔστιν εἶναι, οὐκ ἂν δύναίτο χωρισθῆναι, οὐδ' ἂν ἐφ' ἑαυτοῦ γενέσθαι, ἀλλ' ὅπως περ ἀρχὴν εἶναι καὶ νῦν πάντα ὁμοῦ. ἐν πᾶσι δὲ πολλὰ ἔνεστι καὶ τῶν ἀποκρινομένων ἴσα πλήθος ἐν τοῖς μείζουσι τε καὶ ἐλάσσουσι [”].

【断片 6】「 』内

また、かれ〔アナクサゴラス〕は別のところで、以下のように述べている。「そして、大きいものと小さいものの諸配分〔複数形〕(μοῖραι) が

量的に等しいまさにそのとき、そのようにして〔つまり量的に等しい諸配分で〕、すべてのものども〔それらのいずれも：複数形〕(πάντα) が、すべてのもの〔すなわち各全体：単数形〕の内に(ἐν παντί) 存在していることになり、離れて存在していることはできず、すべてのものども〔いずれも〕がすべてのもの〔各全体：単数形〕の配分〔単数形〕を(παντὸς μοῖραν) 分け合っている。〈そして、〉最小のものが存在しえないなら、切り離されることも自ら生成することもできないとはいえ、原初と同様に、すべてのものどもが今も渾濁していることはできるであろう。すべてのものどもの内に多くのものどもが属している〔内在する〕(ἔνεστι) のであり、分離してきているものどもについてもまた、より大きいものどもと、より小さいものどもの内に、量の等しい多くのものどもが属しているのである。】

見てのとおり、ほとんど絶望的ともいえるほど、内容の把握は困難である。しかし、アナクサゴラスが「すべてのもの」や「すべてのものども」あるいは「多くのものども」と表現している何かを、前節で例示したような冷たいもの、熱いもの、硬いもの、軟らかいもの、その他に置き換え、単数形で呼ばれているか複数形で呼ばれているかに注意して読み解くと、もちろん完全ではないながらも、これほど極度の不可解さが大幅に、さらには劇的に軽減される。

後に検討する予定の諸断片では、稀薄なものと同濃密なもの、熱いものと冷たいもの、乾いたものと湿ったもの、明るいものと暗いものが例示されているので、上掲の【断片6】を解説するにあたって、これらを例として採用することにしたい。また、互いに対立する性質のものが対になる点にも留意しながら、便宜上それぞれを簡略化して、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、ならびに暗と表記し、互いに対立する性質のものどもは他にいくつもありうるため、これら以外のものどもを総じて「その他」と言い表す。さらには、前節で粗描したとおり、各性質の度合いを量的に表現する目的で、空間的な或る一定の大きさ(体積)を基準に設定し、その基準(尺度)に従って各性質の基本単位を定義することにしよう。すると、アナクサゴラスが「小さいもの」と呼んでいる何かは、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他が、それぞれ何単位分のものであるのかという形式で量的に表現される。そして、乖離した性質のものども、互いに対立する

性質のものも、基本単位分の空間的な広がりを満たして相互に浸透し⁽⁷⁾、いわば同居していることから、対立する性質は相殺される分が顕在化しない。したがって、小さいものは、たとえば

稀 3 濃 1・乾 1 湿 1・熱 2 冷 1・明 4 暗 1・その他 ——式②

のように、稀 3 (3 単位分の稀) と濃 1 (1 単位分の濃) で、差し引き 2 単位分だけ希薄なものでありながらも、濃密なものが潜在しているので、基本単位 1 分の濃密なものでもある⁽⁸⁾。

なお、上掲【断片 6】の後半では「切り離されることも自ら生成することもできない」と述べられているけれども、自ら生成しえないとは、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他が、さらには如何なるものであらうとも、無からは生じないということである。詳しくは、次節で生成と消滅に関連する断片を読み解くときに、あらためて検討したい。他方、切り離されえないとは、如何なる性質のものも、対立する性質のものから完全には切り離すことができないという意味である。実際、たとえば濃密なものは、必ず一定の度合いで濃密なものであり、度合いを超越した濃密さなど現実にはありえないだろう。アナクサゴラスは、すべての性質について、このことを完全な切り離しの不可能性という一種独特の仕方で示していた。次のような断片が現存する。DK に倣って、原著から引用されていると思われる 2 箇所をまずあげ、その後に一続きの【断片 8】へと復元することにした。

DK, B8; LM, D22 Simpl. *In Phys.*, 175.11-14.

εἰπόντος τοῦ Ἀναξαγόρου [“ οὐδὲ διακρίνεται οὐδὲ ἀποκρίνεται ἔτερον ἀπὸ τοῦ ἑτέρου [”] διὰ τὸ πάντα ἐν πάσιν εἶναι, καὶ ἀλλαγῶ [“] οὐδὲ ἀποκέκοπται πελέκει οὔτε τὸ θερμὸν ἀπὸ τοῦ ψυχροῦ οὔτε τὸ ψυχρὸν ἀπὸ τοῦ θερμοῦ [”]

すべてのものどもの内に、すべてのものどもが存在しているということ を理由に、アナクサゴラスは「一方から他方が〔完全には〕分化も分離もしない」〔断片 12 の一部分〕と、別の箇所ではまた「熱いものが冷たいものからも、冷たいものが熱いものからも、斧によって〔さえ〕切断

されたことがない〔直接法完了〕〕と述べて〔云々〕

DK, B8; LM, D22 Idem, *ibid.*, 176. 28-29.

τὸ δὲ ὅτι [“] οὐ κερῶριται ἀλλήλων τὰ ἐν τῷ ἐνὶ κόσμῳ οὐδὲ ἀποκέκο-
πται πελέκει [”], ὡς ἐν ἄλλοις φησίν.

別の箇所でも〔アナクサゴラスが〕述べているように「一つの宇宙のなかに在るものどもは、互いに切り離されたことがなく〔直接法完了〕、斧によって〔さえ〕切断されたことがない〔直接法完了〕」。

【断片 8】

一つの宇宙のなかに在るものどもは、互いに切り離されたことがなく〔直接法完了〕、熱いものが冷たいものからも、冷たいものが熱いものからも、斧によって〔さえ〕切断されたことがない〔直接法完了〕。

こうした考え方にもとづいて、基本単位 1 を最小の大きさ（度合い）として設定したからには、式②に示されているように、小さいものが基本単位 1 の濃であると同様、基本単位 1 の湿、基本単位 1 の冷、および基本単位 1 の暗でもあるのは必要最低限の条件である。なぜなら、たとえば式②の乾 1 湿 1 から湿 1 が切り離されて乾 1 湿 0 となれば、小さいものは「度合いを超越して乾いたもの (?)」になってしまうからである。

以上の設定を念頭に置いて、再び【断片 6】の解釈作業に戻ると、如何なるものも「稀かつ濃かつ乾かつ湿かつ熱かつ冷かつ明かつ暗かつその他」なのであり、稀と濃、乾と湿など、互いに対立する両性質がそれぞれ何単位分であるのかを示せば、そのものの諸性質がすべて量的に表される。そして、この点を確認すると、アナクサゴラスが小さいものの「諸配分」と述べているのは、式②で量的に表された一連の諸性質であり、また「配分のされ方」であったと推定される。さらには、問題の意味不明な断片中で、とりわけ難解な「すべてのものども〔それらのいずれも：複数形〕が、すべてのもの〔すなわち各全体：単数形〕の内に存在している」という、ギリシア語の複数形と単数形で意味の差異が明確に区別されている箇所まで整合的に読み解ける。ここで「すべてのものども πάντα」とは、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他の性質であるものどもすべて——複数形であるから、訳文中の〔 〕内に補足したとおり、これも、

あれも、それも、つまり「いずれも」——のことである。他方、単数形の「すべてのもの $\pi\acute{\alpha}\nu$ 」は、すべてのものどもが集まって同じ空間を占めたものであり、式②で考えると、稀 3 濃 1、乾 1 湿 1、熱 2 冷 1、明 4 暗 1、その他、各性質が基本単位 1 の体積に属したものの、稀 3 濃 1・乾 1 湿 1 や 稀 3 濃 1・乾 1 湿 1・熱 2 冷 1 など、諸性質が基本単位 1 の体積に属したものの、さらには、式②が表す「小さいものそれ自体」まで、すべてのものどもが固有の配分で一緒になったもの「それぞれ」に相当し、述べられているとおりに解釈できる。

実際、断片中の「小さいもの」(式②)は、稀 3 濃 1 が基本単位 1 の大きさ(体積)を占め、その内に基本単位 1 として設定された濃が 1 単位分と 3 単位分の稀が存在して、差し引き 2 単位分の希薄なもの、つまり度合い 2 の稀であると同時に、1 単位分の乾と 1 単位分の湿も存在しているため、乾・湿の性質は完全に失われ、2 単位分の熱と 1 単位分の冷が存在しているため、度合い 1 の熱でもあり、さらに 4 単位分の明と 1 単位分の暗も存在しているため、度合い 3 の明であり、その他の性質も同様といったように、一律の形式で諸性質の定量化が可能である。まさしくこれが意味不明であった表現の趣旨にほかならない。差し当たり、基本単位に設定した「すべてのもの」のなかでも、稀 3 濃 1 をもとに解釈したが、他の「すべてのもの」でも【断片 6】で述べられているとおりになる。

たとえば、式②の「小さいもの」が熱 2 冷 1 である点に着目すると、それは基本単位 1 の大きさ(体積)であり、基本単位 1 と設定されている熱 2 単位分と 1 単位分の冷が内に存在しているため、度合い 1 の熱であると同時に、4 単位分の明と 1 単位分の暗が存在しているため、度合い 3 の明でもあり、3 単位分の稀と 1 単位分の濃が存在しているため、度合い 2 の稀でもあるのに加え、1 単位分の乾と 1 単位分の湿も存在し、完全に相殺されて乾・湿の性質は不在であり、その他の性質も同様に度合いが定まる。このように、いずれをもとに理解しても、まさに「すべてのものどもがすべてのもの〔それぞれ〕の内に存在している」ので、諸性質の定量化は一律の形式で達成されるのである。

また、上掲の箇所が続く「離れて存在していることはできずに、すべてのものどもがすべてのもの〔それぞれ〕の配分〔単数形〕を分け合っている」の意味も、同じ方針で読めば、ほぼ述べられているとおりに解釈できるだろう。なぜなら、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他は、いず

れも離れて存在することはできず、互いに浸透し合って基本単位の体積を占め、これらすべてのものどもが「すべてのもの〔それぞれ〕の配分〔単数形〕」を、すなわち、稀3濃1という配分も、乾1湿1という配分も、熱2冷1という配分も、明4暗1という配分も、さらにその他の配分も例外なく「分け合っている」と読み解けるからである。

では、引用して訳出した【断片6】冒頭の「そして、大きいものと小さいものの諸配分が量的に等しいまさにそのとき」を、一体どのように解釈すればよいのだろうか。理解しやすくするために、大きいものは小さいものが三つ集まって3単位分の空間を占める、つまり体積が小さいものと比べて3倍であるとしよう。すると、先ほど示したように、小さいものは

$$\text{稀3濃1} \cdot \text{乾1湿1} \cdot \text{熱2冷1} \cdot \text{明4暗1} \cdot \text{その他} \quad \text{——式②}$$

であるから、大きいものは

$$3 \times (\text{稀3濃1} \cdot \text{乾1湿1} \cdot \text{熱2冷1} \cdot \text{明4暗1} \cdot \text{その他}) \quad \text{——式③}$$

であり、稀と濃、乾と湿、熱と冷、明と暗、その他は、大きいものと小さいもの間で完全に同じ比率になっている。あるいはまた、大きいものが小さいもの三分の空間（3倍の体積）を占めることに留意しながらであれば、大きいものは

$$\text{稀9濃3} \cdot \text{乾3湿3} \cdot \text{熱6冷3} \cdot \text{明12暗3} \cdot \text{その他} \quad \text{——式④}$$

でもある。しかし、式④のように定式化して理解する場合も、稀と濃の比率は $9:3=3:1$ であり、乾と湿、熱と冷、明と暗、その他もまた同様に、度合いとしての配分がそれぞれ $1:1$ 、 $2:1$ 、 $4:1$ 、…と、すべて小さいものと等しくなっている。まさにこの点で「諸配分が量的に等しい」のである。そして、式②と式③との関係ならびに式②と式④との関係は、ゼノンの第二パラドックスから獲得された

$$a : b = b : c = c : d = d : e = e : f = f : g = \dots \quad \text{——式①}$$

の、いわば「性質版定量化図式」にほかならず、相対的瞬間速度の大きさと同様、小さいものを当初どれほど小さく設定しても、逆にまた当初どれほど大きく設定しても、比率の不変性が維持されることを簡潔に表していると解釈できる。ただし、式④で表されているものが、小さいもの三分ではない空間（体積）を占めるのであれば、事情は以上と大きく異なってくる。とはいえ、やや複雑なこの問題は、次節で検討することにした。

こうして、残る【断片 6】の後半もまた、最小の基本単位が便宜上の「設定」でしかない点に留意すれば、ほとんどアナクサゴラスが記しているとおりに読み取れる。その後半は次のとおりであった。「最小のものが存在しえないなら、切り離されることも自ら生成することもできないとはいえ、〔……〕はできるであろう。すべてのものどもの内に多くのものどもが属しているのであり、〔……〕より大きいものどもと、より小さいものどもの内に、量の等しい多くのものどもが属しているのである」。このように省略して読めば、もはや解説がまったく必要ないほど、内容は述べられているとおりに理解できるのではないだろうか。微妙なのは「多くのものども *πολλά*」という用語だけである。これは「多なるものども」と訳してもよい意味をもち、より小さい基本単位が設定されるなら、何単位分かの量（度合い）でもありうる「多なるもの」であり、稀、濃、乾、湿、明、暗、その他いずれでも同様であるため、複数形で「多なるものども」と表現されていると解釈できる。なお、引用に際して省略した「原初と同様に、すべてのものどもが今も渾淆していること」は、宇宙が始まる以前の状態と深く関係する内容であるから、その場面が描かれている諸断片を解読するときに詳しく検討することにし、また「分離してきているものどもについて」の「分離」は、次節で関連する他の断片を読み解きながら問題にする。

第 3 節 相対的な大小関係と生成消滅の真相

すでに【断片 6】と【断片 8】の検討をつうじて、諸性質の定量的な理解を可能にする理論装置の概要が浮かび上がり、たしかに現段階でもかなり謎めいているとはいえ、理論装置の基本となる自然観、すなわち「すべてのものどもがすべてのものどもの内に存在している」の意味も洗い出された。しかし、ここでは慎重に、前節で試みた解釈の有効性を検証する目的

で、判明した諸論点が内容として他の断片と整合するか確認したい。

DK, B3; LM, D24 Simpl. *In Phys.*, 164. 16-22.

καὶ ὅτι οὔτε τὸ ἐλάχιστον ἐστὶν ἐν ταῖς ἀρχαῖς οὔτε τὸ μέγιστον, [“] οὔτε γὰρ τοῦ μικροῦ ἐστὶ τό γε ἐλάχιστον, ἀλλ’ ἔλασσον αἰεὶ (τὸ γὰρ ἐὸν οὐκ ἔστι τὸ μὴ οὐκ εἶναι) —ἀλλὰ καὶ τοῦ μεγάλου αἰεὶ ἐστὶ μείζον. καὶ ἴσον ἐστὶ τῷ μικρῷ πλήθος, πρὸς ἕαντὸ δὲ ἕκαστόν ἐστι καὶ μέγα καὶ μικρόν [”]. εἰ γὰρ πᾶν ἐν παντὶ καὶ πᾶν ἐκ παντὸς ἐκκρίνεται, καὶ ἀπὸ τοῦ ἐλαχίστου δοκοῦντος ἐκκριθήσεται τι ἔλασσον ἐκείνου, καὶ τὸ μέγιστον δοκοῦν ἀπὸ τίνος ἐξεκρίθη ἑαυτοῦ μείζονος.

【断片3】「 」内

そして、諸アルケー〔始源〕のなかには、最小のものもなければ、最大のものもないということ〔アナクサゴラスは以下のように述べている〕。「というのも、(存在しているものが存在していないことは不可能なので、) 小さいものについては最小のものがなく、より小さいものが常に存在しているからであり、大きいものについてもまた、より大きいものが常に存在しているからである。そして、[大きいものは] 小さいものと量が同じであり、それぞれはそれ自身にとって大きく、かつ小さい」。なぜなら、もしもすべてのものがすべてのものの内に存在し、またすべてのものがすべてのものから分離してきている〔直説法現在〕のであれば、最小と思われるものから、それよりも小さい何かが分離されることになり〔直説法未来〕、さらには、最大と思われるものが、それ自身よりも大きい何かから分離された〔直説法アオリスト〕ためである。

差し当たり、断片 () 内の訳出困難な箇所は、従来の標準的な訳し方をしておいた。ところが、この訳文ではまさにこの () 内によって、特に断片の前半が意味不明にならざるをえないのである。それゆえ、内容の解釈に先立って、まずはこの箇所を文法の観点から検討することにしよう。

訳文では「不可能である οὐκ ἔστι」という読み方をしておいた。しかしながら、通常これは非人称の用法であり、不可能な内容は動詞の不定形(不定詞)で示される。たとえば、ゼノンの師とされるパルメニデス(パルメニデース)の有名な用例でも「存在していないことは不可能である

οὐκ ἔστι μὴ εἶναι」⁽⁹⁾ と、否定形の不定詞で不可能とされる内容が記されている。他方、アナクサゴラスの【断片 3】では微妙にこの構文と異なっており、否定形の不定詞《μὴ οὐκ εἶναι》に、定冠詞《τό》が冠されて《οὐκ ἔστι》に後続しているのである。そして、この定冠詞は中性・単数の主格か対格の形であり、ギリシア語の文法に従えば、これを伴う不定詞（句）は主語か目的語か副詞的な用法の対格になる⁽¹⁰⁾。このため、標準的な訳の採用にあたり、なぜ定冠詞が当該の箇所にならされているのか、少なくとも十分に納得できるようには説明できない。しかも、前述のように、標準的な訳で議論の内容を読み解こうとすると、特に断片の前半がほとんど意味不明になってしまうのである。

仮に前掲の訳文が適切であれば、述べられているとおりの「(存在しているものが存在していないことは不可能なので、) 小さいものについては最小のものがなく、より小さいものが常に存在している」のでなければならぬ。つまり、存在しているものは必ず存在しているという当然すぎるほどの理由で、不思議なことに、小さいものについては最小のものがなく、より小さいものが常に存在しているのである。しかし、なぜこの理由で、最小のものが存在しないことになるのだろうか。むしろ、必ず存在している仕方で、最小のものが存在していることに、不都合な点はないと思われる。そして、不都合な点がない以上、より小さいものは存在しないことになるだろう。というのも、問題の（ ）内では存在しているものについて、それは必ず存在している——それが存在していないことは不可能——と語られているにすぎず、たとえば「より小さいもの」といった、存否不明のものが存在していないことまで不可能だとは、そもそも述べられていないからである。さらには、もしも「存在しているものが存在していないことは不可能」という理由で、小さいものと同様に「大きいものについてもまた、より大きいものが常に存在している」と述べられているのであれば、大きさと関係するとは考えにくい不可能性にもとづいて、大きさのことが理由（根拠）づけられているのである。果たして、これらの疑問が解消され、しかも文法どおりである読み方はないのだろうか。

ここではソポクレス作の悲劇『コロノスのオイディプス』を参考にしたい。この作品はアナクサゴラスの生きた時代に成立したもので、次に引用するのは、主人公オイディプスがコロノスの地にやってきたときに、当地の住人が主人公に語る台詞のなかの一つである。

Soph. *Oid. Col.*, 47f.

ἀλλ' οὐδ' ἐμοί τοι τοῦ ξανιστάναι [scil. τὸ ἐξανιστάναι] πόλεως δίχ' ἐστὶ θάρσος, πρὶν γ' ἂν ἐνδείξω τί δρᾶς.

しかし、あなたが何をしているのかを通報するまで、あなたを街〔の指図〕なしに追い出すほど〔対格〕、わたしには勇気がない。

注目したいのは原文で〔 〕内に補足した定冠詞《τό》を伴う動詞の不定形（不定詞）である。これは「限定の対格 *accusativus limitationis*」または「ギリシア式対格 *accusativus Graecus*」と呼ばれる用法で、引用して訳出した上掲の用例では、話者であるわたしに勇気がまったく「存在していない *οὐδ'...ἐστί*」のではなく、独断で誰かを追い出すほど、わたしには勇気が「存在していない」と、中性・対格の定冠詞《τό》が付された不定詞によって限定している。日本語でも「わたしは頭が痛い」のように、主語が二つあるかのような言い方で、わたしは「痛い」を「頭」に限定する。ギリシア語では、これと同様の限定が主格ではなく、対格によって可能なのである。この点はともかく、何か——目下の用例では勇気——の有無について、その「程度」を限定するとき、不定詞の対格を用いる場合があることに着目したい。

では、ソポクレースの用例に倣って、問題の一文を読むとどうなるだろうか。外見上かなり異様な文面になるのを承知のうえで直訳してみよう。すると「存在しているものは、存在していないかぎり (*τὸ μὴ οὐκ εἶναι*)、存在してはいない (*οὐκ ἔστι*) [直説法現在] ので」となる。この訳文を、さらに前段の用例に倣って読み解くと、存在しているものはいずれも、けっして「無際限に」存在しているのではなく、それが存在していない範囲に限っては、当然のことながら存在していないと解釈できる。すなわち、勇気や硬さ、あるいは熱さや明るさ等々が存在する「程度」ではなく、存在しているものが存在している「程度」について述べられているのであるから、それは空間的な大きさか時間的な持続の幅でしかなく、現在時制で存在している、あるいは存在していない「程度」にまで意味の可能性を絞り込めば、存在しているものは何であれ「一定の大きさで」存在し、当の大きさを超えては「存在していない」ということである。

たしかに、通常は自明視されている暗黙の了解事項であるため、簡潔に

表現すると上記の如く、かえって途方もなく難解に見える文面かもしれない。とはいえ、この解釈が的外れでなければ、存在しているものが存在していない範囲は、如何に広大であってもよい。断片に記されているとおり「小さいものについては最小のものがなく、より小さいものが常に存在している」のである。さらに、存在しているものが存在していない範囲は、どれほど狭小でも差し支えないので、同様に「大きいものについてもまた、より大きいものが常に存在している」ことになる。しかも、このように読み解けるだけではなく、断片後半の「〔大きいものは〕小さいものと量が同じであり、それぞれはそれ自身にとって大きく、かつ小さい」も一貫した文脈で解釈できる。というのも、大きいものの量と小さいものの量が同じであるとは、すでに第 2 節で説明したように、式②と式③の関係で両者の「諸配分が量的に等しい」ということであり、また、存在しているものが存在していない範囲を、どのように設定しても差し支えないため、如何なるものも他のものと比較しなければ、それぞれは「それ自身にとって大きく、かつ小さい」としか言いようがないからである。ゼノンの表現を借りると、それぞれはそれ自身にとって「小さく、かつ大きくなければならず、一方で大きさがなくほど小さく、他方ではまた無限であるほど大きくなければならない」⁽¹¹⁾のである。しかし、いま検討中の【断片 3】に続くシンプリキオスの解説は、文脈からしてもその微妙さに注意して理解しなければならない。

アナクサゴラス当人は【断片 3】の後半で、小さいものと大きいものの大きさに加え、両者の量が同じであること、つまり稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他、性質の度合いが等しいことを指摘している。それゆえ、シンプリキオスがこの文脈に沿って、正確に解説しているのであれば、解説されている内容は空間的な大きさについてだけでなく、諸性質についても整合ししなければならないだろう。しかも、かれは「もしもすべてのものがすべてのものの中に存在し、またすべてのものがすべてのものから分離してきている〔直説法現在〕のであれば、……分離されることになり〔直説法未来〕、……分離された〔直説法アオリスト〕ためである」と、表現が微妙に異なるとはいえ、アナクサゴラス自然論の、いわば根本命題を条件節（前件）にして、帰結節（後件）の各「分離」を解説している以上、この整合性は不可欠だと考えてよさそうである。

そこで再び、性質の度合いについても検討できるように、シンプリキオ

スが解説している内容を、前節と同じく、小さいもの3単位分が集まった大きいもの、すなわち

$$3 \times (\text{稀}3 \text{濃}1 \cdot \text{乾}1 \text{湿}1 \cdot \text{熱}2 \text{冷}1 \cdot \text{明}4 \text{暗}1 \cdot \text{その他}) \text{ --- 式③}$$

という例で具体的に理解することにしたい。さて、この大きいものから、基本単位の大きさ（体積）で各性質が式③と同じ各配分（各度合い）の小さいものが三つ分離する、言い換えれば均等に三つの小さいものとなる分離が起こるとするのは、極めて単純で理解しやすい。また、この場合は分離後に分離前と同じ諸性質をもつ小さいものが現れ、分離前と異なった諸性質をもつものは現れないので、起こっているのは分離、分割、分解、あるいは分裂であり、けっして分化（多様化）ではないと理解できる。他方、同じ式③の大きいものから、式③とは異なった諸配分の小さいものが、基本単位の大きさ（体積）を占めて分離する場合もある。たとえば、

$$3 \times (\text{稀}3 \text{濃}1 \cdot \text{乾}1 \text{湿}1 \cdot \text{熱}2 \text{冷}1 \cdot \text{明}4 \text{暗}1 \cdot \text{その他}) \text{ --- 式③}$$

↓分離

$$\text{稀}3 \text{濃}1 \cdot \text{乾}1 \text{湿}1 \cdot \text{熱}2 \text{冷}1 \cdot \text{明}4 \text{暗}1 \cdot \text{その他} \text{ --- 式②}$$

+

$$\text{稀}6 \text{濃}2 \cdot \text{乾}2 \text{湿}2 \cdot \text{熱}4 \text{冷}2 \cdot \text{明}8 \text{暗}2 \cdot \text{その他} \text{ --- 式⑤}$$

のように、二つの小さいものが大きいものから分離する場合である。この場合、分離の前後で大きさ（体積）が、基本単位3単位分から2単位分に変化しているため、その点でもまた均等ではない分離になっていると理解してよいだろう。

いずれにせよ、式②の小さいものは見てのとおり、大きいものが三つに均等分離した場合と同じ諸配分で、しかも同じ基本単位1相当の大きさである。他方、式⑤の小さいものは、式②のそれと大きさが同じ基本単位1相当であっても、その基本単位の内に6単位分の稀と2単位分の濃が存在して、差し引き4単位分の稀であると同時に、2単位分の乾と湿も存在しているため乾・湿の性質はなく、4単位分の熱と2単位分の冷が存在していることから、差し引き2単位分の熱であり、また8単位分の明と2単位分の暗が存在しているため、差し引き6単位分の明でもあり、以下同様と

いったように、各性質の度合いが式②と比べて倍増したものになっている。そして、これよりも複雑な分離がいくらかでも考えられ、単なる分離や分解の域を超えた分化——上記の例では式③のものから式②のものと式⑤のものへの多様化——の量的表現が可能になる。したがって、シンプリキオスが解説しているアナクサゴラスの自然論には、自然の多様性や複雑な分化のメカニズムを定量的に説明する可能性が、驚くほど入念に確保されていたのである。

しかし、以上のような可能性が実現するためには、或る原則が立てられなければならない。それは基本単位の設定に関する原則である。すでに言及したように、基本単位の設定は自由であり、精密さを高めたければどれほど小さくしてもよい。実際、たとえば式②ではなく式③を「小さいもの」として立てると、その3分の1に相当する大きさ（体積）をもつ式③の諸部分が「より小さいもの」として考えられるので、より小さいものが占める体積を新たな基本単位に設定した場合、稀、濃、乾、湿、明、暗、その他、性質の基本単位がすべて当初の3分の1になる。しかし、新たな基本単位にもとづいても、それらの諸配分は式②と式③の関係および式②と式④の関係で確認したとおり、同じ比率を維持するのでもなければならない。この原則に従うかぎり、基本単位をより小さくすることは際限なく可能であるから、式②には濃や乾など、基本単位1分の性質（のもの）があるため、もはや分割できないように思えても、基本単位をより小さくすれば何単位分にもなりうる。それゆえ、シンプリキオスの解説どおり「最小と思われるものから、それよりも小さい何かは分離される」ことになる（直説法未来）のである。逆にまた、式③ではなく式②を大きいものとするれば、その3倍に相当する式③の全体が「より大きいもの」として考えられ、各性質の基本単位も一律に3倍であることが許容される。たとえばこのようにして「最大と思われるものが、それ自身よりも大きい何かから分離された〔直説法アオリスト〕」であり、分離に打ち止めはない。

シンプリキオスは、アナクサゴラス自然論の「分離」を、以上のように解説していたのかもしれない。ただし、根本命題とも呼べる「すべてのものがすべてのものの内に存在している」に言及しているとはいえ、解説箇所を慎重に読み返して再確認すると、かれが問題にしているのは大きさだけである。このため、諸性質についての定量的な理解と結果的に整合しているだけで、事実上の整合性は単なる偶然にすぎない可能性もある。それ

ゆえ、シンプリキオスがどれほど正確にアナクサゴラスの著作を理解していたのかは、まだほとんど不明だと考えておくほうがよいだろう。このことも念頭に置きながら、諸性質の量的な扱いを可能にする理論装置について、重要な側面をさらにいくつか確認しなければならない。

基本単位の設定は自由であった。とはいえ、第1節の最後に指摘したことであるが、それは一貫して、諸性質の度合いを量的に表す基準かつ尺度の基本単位でなければならず、他の何かによって量的に表されることがあってはならない。しかも、基本単位の設定は式②と式③の関係が示しているように、諸配分の比率が不変であるかぎりでのみ自由なのである。また、基本単位の設定によって、ひとたび各性質の総量が定めれば、その総量は分離の前後で保存されなければならない。たとえば、式③の大きいものから式②の小さいものと式⑤の小さいものが分離（不均等分離）する例で考えると、式③で総量9の稀が分離後の式②では3、式⑤では6になっていて、総量は保存されている。それとともに、濃も乾も湿も明も暗もまた、総量は分離の前後で保存されていることが分かる。しかも、この特徴は生成消滅の否定という、アナクサゴラス自然論の根幹に直結するのである。関連する著作断片を引用して訳出することにしよう。原文表記は原則どおり AC に従う。

DK, B17; LM, D15 Simpl. *In Phys.*, 163. 18-24.

σαφῶς δὲ Ἀναξαγόρας ἐν τῷ πρώτῳ τῶν Φυσικῶν τὸ γίνεσθαι καὶ ἀπόλλυσθαι συγκρίνεσθαι καὶ διακρίνεσθαι λέγει γράφων οὕτως · [“] τὸ δὲ γίνεσθαι καὶ ἀπόλλυσθαι οὐκ ὀρθῶς νομίζουσιν οἱ Ἕλληνες · οὐδὲν γὰρ χρῆμα γίνεται οὐδὲ ἀπόλλυται, ἀλλ’ ἀπὸ ἐόντων χρημάτων συμμίσγεταί τε καὶ διακρίνεται. καὶ οὕτως ἂν ὀρθῶς καλοῖεν τό τε γίνεσθαι συμμίσησθαι καὶ τὸ ἀπόλλυσθαι διακρίνεσθαι [”].

【断片 17】「 」内

アナクサゴラスは『自然論』の第一巻で、生成し消滅するとは結合し分化することであると、次のように記しながら明確に語っている。「生成し消滅することを、ギリシア人たちは正しく考えていない。なぜなら、何も生成することはなく、また消滅することもなく、ものは存在しているものどもから混ざり合い、また分化しているからである。そして、このとおりに〈生成する〉を〈混ざり合う〉と、また〈消滅する〉を〈分

化する」と、かれらは正しく呼ぶのが望ましい」。

前掲の各式に当てはめながら読めば、シンプリキオスの解説も、断片にアナクサゴラス自身が記していることも、困難なく理解できるのではないだろうか。

実際、生成と消滅がそれぞれ混合（混ざり合い）と分化（多様化）に対応するということは、式③で表されている大きいものから、式⑤の小さいものが「生成する」ときに、大きいものが部分的に「消滅する」プロセスとして、語られているとおりに読み解ける。つまり、式③のうち 2 単位分（式②の小さいもの二つ）が基本単位 1 相当の大きさ（体積）をもつ式⑤の小さいものへと、合成を伴って混ざり合うと同時に、基本単位 1 相当の大きさをもつ式②の小さいものだけが残る仕方で、式③の大きいものは分化（多様化）しているのである。このように、式③の大きいものが「消滅する」——量的には体積 2 単位分だけ消滅する——とは、それが式②の小さいものと式⑤の小さいものに「分化する」ということを意味する。しかも、式②の小さいもの二つが「混ざり合う」ことで、式⑤の小さいものが外見上は体積 1 単位分「生成する」のである。かくして、上掲の断片で語られているとおりに、同プロセスの前後で「何も生成することはなく、また消滅することもなく、ものは〔いずれも〕存在しているものどもから混ざり合い、また分化している」ことが分かる。それゆえ、ギリシア人たちは、言語の慣用に惑わされることなく、自然現象の真相に即して「生成する」を「混ざり合う」と呼び、また「消滅する」を「分化する」と呼ぶべきなのである。

しかし、この【断片 17】の解釈にあたっては、かなり微妙な点に注意を払っておきたい。もしも式③の大きいものから、

3×（稀 3 濃 1・乾 1 湿 1・熱 2 冷 1・明 4 暗 1・その他）——式③

↓分離

稀 3 濃 1・乾 1 湿 1・熱 2 冷 1・明 4 暗 1・その他 ——式②

+

2×（稀 3 濃 1・乾 1 湿 1・熱 2 冷 1・明 4 暗 1・その他）

～やや小さいもの

のように、基本単位1相当の大きさ（体積）をもつ式②の小さいものと、基本単位の大きさをもつ式②の小さいものが二つ集まった「やや小さいもの」が分離するのであれば、言語の慣用に今までどおり従っても、生成や消滅が起こっているとは言わないはずである。というのも、言語の慣用に従うと、それまでは存在していなかった何かが現れる場合に、われわれはその何かが「生成する」と表現し、存在していたものが無くなる場合に「消滅する」と表現するのであり、この事情は古代ギリシアでも同様であったに違いないからである。

言語の慣用に惑わされることがあるとすれば、それは分離、分割、分解、あるいは分裂の前後で、外観からすると存在していた何かが無くなり、外観では存在していなかった何かが現れる場合であろう。すでに用いた例で、式③の大きいものから、式②の小さいものと式⑤の小さいものが、いずれも基本単位1相当の大きさ（体積）をもって分離してくるとき、存在していた式②の小さいもの2単位分が無くなり、同時にまた、存在していなかった式⑤の小さいものが、基本単位1相当の大きさで現れるように見える。このような分離に関してのみ、アナクサゴラスの自然論からすると、言語の慣用が自然現象の真相を隠してしまうのである。かれはこの微妙さを正確に伝える目的で、おそらく《ἀποκρίνεσθαι》という語と《διακρίνεσθαι》という語を、極めて慎重に使い分けていると推察される。当初より、前者を「分離すること」と訳す一方、後者を「分化すること」と訳し分けたのは、分詞その他、不定詞以外の用例も含めて、まさに以上の理由からであった。

さらに、現存する別の断片では、生成と消滅の全面的な否定に関連して、分離の前後ですべてのものどもの量が不変であると指摘されている。

DK, B5; LM, D16 Simpl. *In Phys.*, 156. 9-13.

ὅτι δὲ οὐδὲ γίνεταί οὐδὲ φθείρεται τι τῶν ὁμοιομερῶν, ἀλλ' αἰεὶ τὰ αὐτὰ ἔστι, δηλοῖ λέγων · [“] τοῦτων δὲ οὕτω διακεκριμένων γινώσκειν χρῆ, ὅτι πάντα οὐδὲν ἐλάσσω ἐστὶν οὐδὲ πλείω (οὐ γὰρ ἀνυστὸν πάντων πλείω εἶναι), ἀλλὰ πάντα ἴσα αἰεὶ [”]. ταῦτα μὲν οὖν περὶ τοῦ μίγματος καὶ τῶν ὁμοιομερειῶν.

【断片5】「 」内

同質部分体〔複数形〕のいずれも生成せず、また消滅もせず、常に同じ

ものどもであることを明らかにしながら、かれ〔アナクサゴラス〕は言っている。「それらはこのようにして分化した〔完了分詞〕のであるから、すべてのものどもは、より少なくも、より多くもなく（というのも、すべてのものどもよりも多いことはありえないのだから）、すべてのものどもは常に同じ〔量〕であると判断しなければならない」。たしかにこれらのことを、混合体〔単数形〕と同質部分体〔複数形〕について〔、かれは言っている〕。

訳文冒頭の「同質部分体 *ὁμοιομερῆ*」は極めて重要な用語である。しかし、現存する断片群では一度も使われていない用語であるといった問題もあり、その歴史的背景を含めた取り扱いと詳しい検討は次節で行うことにする。

ここでは、同質部分体（複数形）が「常に同じものどもである」と明言されて、それらが「このようにして分化した」という文脈で、アナクサゴラスの著作から引用されている点に着目したい。というのも、この文脈はほとんど破綻しており、常に同じものどもが分化（多様化）したという言い分は、そもそも語義矛盾でしかないからである。たしかに、完了分詞が用いられていることから、分化が完了して以降は常に同じものどもであると、好意的に読めるかもしれない。しかし、それでも「常に」の意味を厳密に理解するかぎり、常に同じものどもが分化することはありえないように思える。そして、このことからすると、シンプリキオスがアナクサゴラスの著作を、少なくとも「分化」ないし「多様化」に関連する内容について、正確には理解できていなかった可能性さえある。あるいは、断片中の「すべてのものども *πάντα*」が同質部分体であると、シンプリキオスは解釈したのかもしれない。しかし、その場合は引用の仕方が不自然になり、断片冒頭の「それら」が何を指すのか、まったく不明になるというほかない。ただし、訳文中の「分化」が不適切な訳語で、生成と消滅を伴わない「分離」や「分解」とされるべきであるならば、かれのアナクサゴラス理解を疑う理由もなくなるので、その可能性も見失うことなく慎重に検討する必要がある。

まず、断片冒頭の「それら *τούτων*」（独立属格）が指すものを、文法に従った性・数の一致で【断片 5】のなかに求めれば、絞り込まれる候補は「すべてのものども」である。そして、当該の「すべてのものどもは、よ

り少なくとも、より多くもなく〔……〕、すべてのものどもは常に同じ〔量〕である」と述べられている。このため、もしもアナクサゴラスが分化ではなく、分離や分解を問題にしているのであれば、同断片の「それら」と「すべてのものども」は、どちらも同質部分体を指示すると読み取れそうである。しかし、そのように読むと、別の不都合な問題が生じる。分かりやすくするために具体例で考えたい。

生成せず、また消滅もせず、常に同じものどもである同質部分体を、ここでは「水」としてみよう。たしかに、液体と気体と固体の状態があるので、液体の水が部分的に凍るなど、当然それらの状態間で水の分化（多様化）は起こりうる。そこで、蒸発も凝固も考えずに、もっぱら液体としての水を考え、その「分化」ではなく、多様化と無縁の単なる「分離」について説明されているとしよう。すると、この【断片5】によれば、たとえば3リットルの水から1リットルの水と2リットルの水が分離したとき、その総量はより少なくも、より多くもなく（というのも、当初の総量よりも多いことはありえないのだから）、常に同じであると判断しなければならないのである。なるほど、この説明に異議を唱える者は、非常に少ないことであろう。とはいえ、こうした類いの言い分に感心して納得する者は、古代でも現代でも、異議を唱える者と比べて、遥かに少ないのではないだろうか。なぜなら、見てのとおり、当然すぎるものが述べられているだけで、理解の深まりは何もないからである。この例からも分かるように、断片冒頭の「それら」が指示している諸対象は、外観の変化ないし分化（多様化）を伴うものどもでなければならない一方、それらと水準を異にする「すべてのものども」については「常に同じであると判断しなければならない」のである。すなわち、冒頭の「それらはこのようにして分化したのであるから、……」と記されているとおり、まさにそのような分化のメカニズムが「すべてのものども」について判断するときの根拠になるのである。

以上の点からも、本研究では「それら」と呼ばれている諸対象を、式②～⑤で表されるものどもとしてきた。その一方で、常に同じである「すべてのものども」は、他の諸断片と内容が整合するように、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他、性質の基本単位であると、一貫して解釈してきたのである。他方、もしもシンプリキオスが「それら」も「すべてのものども」も同質部分体を指すと解釈したうえで、外観の変化を伴う分離

過程について語っているのだとすると、次節で明らかにするように、かれは極めてグロテスクな「分化」をアナクサゴラスに帰していたことになる。いずれにせよ、現時点では予告にとどめ、同質部分体が量に関して「常に同じものども」であるとしている点で、かれの理解は正しいと推定しておくことにする。しかし、同質部分体は量が常に同じであっても、外観の変化を伴わなければならない。そのかぎりでは、断片冒頭の「それら」は同質部分体を指示することができ、文脈も引用の仕方も自然なものとなるのである。換言すると、シンプリキオスは均等分離の量に一面化した理解によって、事物の諸性質とそれらの変化が量的に定式化されること、すなわちアナクサゴラスの画期的な着想とその成果を、おそらくは十分に理解することができなかつたのであろう。が、ともかくも、この【断片 5】で語られている内容を、慎重に読み取らなければならない。ところが、形式的にも内容的にもこれと酷似した議論を、実はゼノンが独自に展開していたのである。

現存するゼノンの著作断片に次のようなものがある。「もしも多なるものどもが存在しているなら、それらは存在している数だけ存在しているのであり、それら自身より多くも少なくもないのでなければならない。そして、存在している数だけ存在しているのであれば、それらは有限であるだろう」⁽¹²⁾。たしかに、アナクサゴラスは【断片 5】で、量の多さや少なさを問題にしているのであって、数を問題にしているのではまったくない。とはいえ、かれが行った諸性質の定量化は、基本単位の設定にもとづくと推定され、仮にこの推定が的外していなければ、諸性質の量（度合い）は基本単位の数で表現されるので、ゼノンの指摘はその量（度合い）にも当てはまる。この点を考慮するのであれば、訳文中の補足「同じ〔量〕である」は、より正確に「同じ〔数量〕である」としたほうが適切かもしれない⁽¹³⁾。いずれにせよ、ゼノンは同断片の後半で、多なるものどもの存在を仮定すると、多なるものどもはもとより、存在しているものどもの数が無限であることを、厳密な論理展開で必然的に導いていた⁽¹⁴⁾。それゆえ、もしもアナクサゴラスがこの論証を知っていたとすれば、何らかの仕方ですべてに対応していると予想される。

すでに確認したように、式③と式②および式⑤との関係で理解される分化のメカニズムは、稀、濃、乾、湿、熱、冷、明、暗、その他、諸性質の基本単位が設定されて、それら「すべてのものども」それぞれの量（数

量) が有限の値で表されるからこそ成り立つ。また、生成消滅を全面的に否定するアナクサゴラスの自然観も、すべてのものどもの総量(総数量)が有限の値に保存されると了解されなければ成り立ちえない。なぜなら、仮に量や総量が如何なる仕方でも不定という意味で、すべてのものどもが「無限 ἄπειρα」だとすれば、式②と式③と式⑤は想定すら不可能であり、保存ということが意味を失うため、生成消滅の否定どころではなくなってしまふからである。それゆえ、ゼノンが指摘するように、すべてのものどもについても「それらは存在している数だけ存在しているのであり、それら自身より多くも少なくもないのでなければならぬ」のである。「そして、存在している数だけ存在しているのであれば、それらは有限であるだろう」。しかし、その一方ではまた、式②と式③の関係が示していたように、諸配分の比率を不変に保つ基本単位の設定は際限なく微小にできるため、すべてのものどもの総量(総数量)が無限であることも妨げられない。この意味では、ゼノンの指摘どおり、存在しているものどもの数は無限である。アナクサゴラスが「すべてのものどもは常に同じ[量]であると判断しなければならぬ」かった背景には、以上のような有限と無限の両立という、桁外れに深遠で困難な問題があったと推察される。

なお、シンプリキオスは【断片 5】の直後に、引用した当該の箇所が単数形の「混合体」と複数形の「同質部分体」に関わる内容であると、自らの確信のほどを述べていた。しかし、これらは他の断片との関連で、後ほどあらためて検討することにした。(つづく)

註

- (1) Cf. e.g. D. Sider, *The Fragments of Anaxagoras*, 2nd. ed., Academia Verlag: Sankt Augustin 2005, p. 7f.; M. Schofield, *An essay on Anaxagoras*, Cambridge UP: Cambridge · London · New York · New Rochelle · Melbourne · Sydney 1980, p. 81. なお、本研究ではアナクサゴラスの著作断片が、ギリシア語の文法どおりに訳出されているため、文法に従わない読み方にもとづく従来の優勢な諸解釈と、当然のことながら解釈内容に大小の齟齬がある。しかし、従来の読み方と解釈に対する批判的な検討は、本紀要で定められた紙幅の制限で盛り込めないため、同時執筆中の拙著で行うことを申し上げておきたい。
- (2) 拙稿「ゼノンのパラドックスについて (1)」『成蹊法学』第 93 号 (2021 年 2 月) 243-259 ページ所収の第 1 節を参照。
- (3) 拙稿「ゼノンのパラドックスについて (3)」『成蹊法学』第 95 号 (2022 年 1 月) 191-212 ページ所収の第 6 節を参照。

- (4) F・M・クレヴェは、対立する性質のものがすべて空間的な広がりをもつと、正確にアナクサゴラスの諸断片を解釈している (F. M. Cleve, *The Giants of Pre-Sophistic Greek Philosophy — An Attempt to Reconstruct their Thoughts*, 1965, 3rd. ed., Martinus Nijhoff: The Hague 1973, p.178)。しかし、かれは大きいものと小さいものを「大一小の元素 the great-small-element」と定式化して、対立する性質のものどもと単純に並列している (*ibid.*, p.184)。
- (5) 拙稿「ゼノンのパラドックスについて (4)」『成蹊法学』第 96 号 (2022 年 6 月) 197-220 ページ所収の第 8 節と第 9 節を参照。
- (6) H. Diels, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, hrsg. von W. Kranz, 2. Band, 6. Aufl., Weidmann: Dublin・Zürich 1972. 本文中では略記号 DK で表し、慣例に従い、著作断片は B に断片番号を添えて、たとえば B2 のように出典を示す。A. Laks & G. W. Most (eds.), *Early Greek Philosophy*, vol. VI, part 1, Harvard UP: Cambridge・Massachusetts・London 2016. 本文中では略記号 LM で表し、学説は D に資料番号を添えて、たとえば D7 のように、証言や言及は R に資料番号を添えて、たとえば R12 のように出典を示す。アナクサゴラス断片とは異なる史料を示す場合は、慣例に従って、たとえば第 29 章の断片 1 を DK, 29B1 のように表記する。著作断片については、D. Sider, *op. cit.* (1); P. Curd, *Anaxagoras of Clazomenae, Fragments and Testimonia*, Univ. of Toronto Press: Toronto・Buffalo・London 2007 を、本文および註でそれぞれ略記号 FA と AC で表し、本文中では原則として AC からギリシア語の原文を引用して、DK と LM の断片番号を併記する。さらに、ケンブリッジ大学出版社版、*The Texts of Early Greek Philosophy, The Complete Fragments and Selected Testimonies of the Major Presocratics*, Part 1, ed. and translated by D. W. Graham, Cambridge UP 2010 を参照しつつも、版によって表記が異なる場合は必要に応じて断り書きし、DK では並べ置き of のイオタ (iota adscriptum) が用いられているが、小文字については下書き of のイオタ (iota subscriptum) を用いることにする。
- (7) たしかに、この相互浸透という見解は、今から 1 世紀以上も前に F・M・クレヴェが示していたものである (F. M. Cleve, *op. cit.* (4), p.195 n.1)。しかし、かれは様々な性質のものを粒子と解釈し、現代的な分子や原子のモデルに引き寄せて考えるため、複数の粒子が同じ空間を占めて相互に浸透することが、意外な真相であるように思えるのである (*ibid.*, p.194)。これに対して、アナクサゴラスが「すべてのものども」と呼ぶ様々な性質のものそれぞれを、自由に設定された基本単位に従って数量化される各性質と解釈すれば、諸性質が相互に浸透しているのは当然のことである。
- (8) F・M・クレヴェはかねてより、一見これと似た今日の化学式を思わせる記号表記で、現代化学の分子に相当する構成要素 (mereia) を定式化している (F. M. Cleve, *op. cit.* (4), p.211f.)。しかし、本研究はこれと異なり、モイラを単離不可能な究極の粒子とするなどの実体化 (*ibid.*, esp. p.189) は行わず、現存する諸断片の叙述に従って、ものや構成要素の基本単位は無限に小さくできるものと解釈する。

アナクサゴラスの自然論 (1)

- (9) A. Laks & G. W. Most (eds.), *Early Greek Philosophy*, vol. V, part 2, Harvard UP: Cambridge · Massachusetts · London 2016, 19D6 (=DK, 28B2).
- (10) M. Schofield, *op. cit.* (1), p. 157 n.15. なお、M・スコフィールドはこのため、問題の定冠詞を削除する校訂 (*ibid.*, p. 80) が最も無難であると提案している。かれは従来の様々な読み方を包括的に検討しており (*ibid.*, p. 156f. n.15)、問題の定冠詞を《τοῦν》に改める案に対してもまた、非常に説得力のある批判を行っている (*ibid.*, p. 157 n.15)。
- (11) A. Laks & G. W. Most (eds.), *op. cit.* (9), 20D6 (=DK, 29B1).
- (12) *Ibid.*, 20D11 (=DK, 29B3).
- (13) この箇所には「量的に in quantity」と補足されることが多い (e.g. LM, p. 65; F. M. Cleve, *op. cit.* (4), pp. 181, 204)。
- (14) 拙稿「ゼノンのパラドックスについて (2)」『成蹊法学』第 94 号 (2021 年 7 月) 275-288 ページ所収の第 4 節を参照。